

平成29年度  
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI  
(研究成果の社会還元・普及事業)  
実施報告書

HT29329 プログラム名 熱帯・亜熱帯の島々に暮らす人々は生物とどのように関わって生きているのだろうか？



開催日：平成29年7月23日

実施機関：鹿児島大学

(実施場所) (学国際島嶼教育研究センター)

実施代表者：河合溪

(所属・職名) (国際島嶼教育研究センター・教授)

受講生：4名

関連URL：<https://www.facebook.com/amamist.ka.goshima.u.jp>

【実施内容】

本プログラムは平成29年7月23日に奄美市柳町にある鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室において、4名の学生を迎え以下の活動を行った。

このプログラムでは、以下のように、海と陸の動物と陸上植物を例に、生き物と人との関係を講義と実習から学び、将来に向けた人と自然の持続的な関係について勉強した。

講義①「沿岸の生物と人の生活」(河合)：貝殻に影響する要因と人の生活との関係について説明し、貝殻を観察しどのような模様がどの生息域に多いのかを調べ、人々の生活がどのように貝殻多様性に影響をしているかを理解する。

講義②「衛生昆虫と人の健康」(大塚)：講義で熱帯・亜熱帯の感染症の現状を説明し、午後に行う実習の説明を行う。実験では身近に生息する蚊の構造を顕微鏡で観察し、昆虫の構造や蚊独自の吸血するための口器の構造を観察する。

講義③「人による植物の利用」(山本)：前日の朝食・昼食・夕食で何を食べたのか列挙させ、各作物の起源地を想定させる。そして、各作物の起源地の答え合わせをしながら、様々な作物の起源地が世界の8か所に集中することを学ぶとともに、アジア・オセアニアの基層文化である根菜農耕文化の構成作物を理解する。

総合討論(河合)：総合討論では、参加者が生活している奄美群島での人と自然の関係について説明を受け、身近な問題としてとらえることで、今後の人と自然の持続的な関係について各自の考えを整理しながら考えていく。

■受講生にわかりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点。

近隣の学校に広報活動を行った際に、講義と対応する実験とをスケジュール上できるだけまとまった形にした方が受講者の理解が得やすいとのアドバイスを受けたため、実施にあたってはスケジュールを変更して行った。講義の際に各自が考えたことを実験や討論において検討・確認できるようすることにより、自ら考える契機となるようにした。

■当日のスケジュール (実際のスケジュールに合わせて修正願います)

9:30～10:00 受付(集合場所:国際島嶼教育研究センター奄美分室)

10:00～10:15 開講式(挨拶、オリエンテーション、科研費の説明)

10:15～10:35	講義①「沿岸の生物と人の生活」(終了後 10 分休憩)
10:45～11:05	講義②「衛生昆虫と人の健康」(終了後 10 分休憩)
11:15～12:00	講義③「人による植物の利用」
12:00～12:20	奄美分室紹介
12:20～13:20	昼食・休憩(奄美分室)
13:20～14:05	実験①「貝殻の多様性に人はどれだけ影響しているのだろうか」
14:05～14:25	学生の発表
14:25～15:10	クッキータイム
15:10～15:55	実験②「蚊の体の構造を詳しく見てみよう」
15:55～16:10	学生の発表
16:10～16:50	総合討論
16:50～17:10	修了式(アンケートの記入、未来博士号の授与)
17:10	終了・解散

### ■実施の様子



蚊の解剖実験の様子



奄美の人と自然に関する総合討論の様子

### ■事務局との協力体制

研究協力課が日本学術振興会との連絡調整と提出書類の確認等を行った。広報活動や前日準備、当日の受付、片付け等も国際当初教育研究センター奄美分室の協力があり、実施者はプログラムの実施に集中することが出来た。

### ■広報活動

機関のHP、近隣小中学校へのチラシ配布、訪問広報活動、新聞広告掲示のほか、国際当初教育研究センター奄美分室のフェイスブック、地域のFM放送による広報活動を行った。

### ■安全配慮

参加者、実施分担者、協力者を保険に加入させた。実習においては、安全に関する説明を行った上で、実施分担者・協力者による十分な補助の元、実施した。

### ■今後の発展性、課題

奄美で実施される講演会などは奄美の特殊性のみに焦点を絞って扱いがちであるが、生き物と人の関係、人と自然の持続的な関係について、世界との比較において説明を行ったことが、受講者の興味を引き出すことに成功しており、アプローチとして妥当であったと考える。

一回目ということもあり、広報活動について準備不足・時間不足な点が出てしまったのが今後の課題である。

**【実施分担者】**

大塚靖	鹿児島大学 国際島嶼教育研究センター	准教授
山本宗立	鹿児島大学 国際島嶼教育研究センター	准教授
藤井琢磨	鹿児島大学 国際島嶼教育研究センター	特任助教
鈴木真理子	鹿児島大学 国際島嶼教育研究センター	プロジェクト研究員

**【実施協力者】**       2   名

**【事務担当者】**

吉仲 健一            研究協力課研究協力係・主任